

# 「災害のあと 震災のまえ」

最終話

當眞嗣朗

「災害のあと 震災のまえ」

最終話

自分の身体の何倍もの大きさに膨れあがった恐怖が、津波のような勢いで、ノボルを包み込み、その小さな存在をどこか遠くへと懸命に押し流そうとしていた。それらは手足に絡みつき、胴体を鎖のように縛りあげ、内臓を圧迫し、骨を砕こうとしていた。声が出ない。それでもようやく「どうして？」と、凍り付いた声を溶解させて一言発した。その後、ツネコ姉さんが言った。その声は一切の感情を排した平坦で冷ややかなものだった。

「粘液は危険だ。直接触れると害がある。だから触るな」

「――でも、ガクシャさんが」

ノボルは体内に流れ込んだ恐怖を押し出すようにして言った。

「これは彼が望んだことだ」

姉が言った。

「え？」

「彼が望んだんだよ。彼はここで殺されることを望んでいたんだ。俺はそれを頼まれていた。昔の約束だ。それでその時が来た。だから撃つたのさ」

ノボルの脳裏に先刻、学者とツネコ姉さんとの間で交わされた言葉が鮮明に蘇った。学者は思いつめたような声音で、頼みがあるんだ、と言ったのだ。その一言には確固とした意思があり、決意の核があつた。もちろんそれは十歳に満たない子供の底の浅い認識だ。しかし少年にとってそれは唯一、信じるに足る明確な事実だった。それが例の約束だったのだ。

彼は子供の敏感さを示して事態を察し、理解に努めようとした。しかしその脳裏に漂う暗雲は決して晴れることがなかった。疑問はその規模を縮小することなく漫然と存在し、彼が理解の高みへと上昇することを固く阻んでいた。成長の途上にある頼りない小さな背中是不快な汗で満たされた。もしもそれが充分な成長の後に解消される疑問ならば、どれほどの割合で自分は救われたのだろうか？ ノボルの思考は暗

い回廊を不安な面持ちで回りつづけた。それが彼の胸に嫌な感触を与えた。

冷静であろうと努めるほど身体は、この非常事態に敏感に反応して震えだした。その意思を欠いた小刻みな震えは、自意識の発する制動には遠く及ばない類いのものだった。それは表皮を擦り抜けて肉に浸透し、ついには骨へと到達して、身体を骨格ごと揺るがせた。ノボルは芯を抜かれた人形に似た動きでその場に座り込み、胃のなかのものを全部、足元へと吐き出した。腹部は不快さに振<sup>な</sup>れていた。それは体内へと潜り込んだ現実の生む嫌な感触だった。涙が溢れ出してきた。彼は必死で、自己に問いかけた。何故？ 何故？ 何故？ それは本来、問われるべき対象へと真摯に向けられるべきものだった。しかし今、すべての現実<sup>じ</sup>はノボル自身へとその矛先を定めていた。何故だろう。彼は繰り返し、自分自身に問いかけた。目の前の地面に吐き出された吐しゃ物は、ガバメントのお菓子の残骸だった。遠い異国の存在を知ったからか

もしれない。ノボルは空しさの募る面持ちで、そう考えた。

「立て」

ツネコ姉さんが夢見がちの子供を叱り付けるような厳しい口調で、ノボルに言った。彼女は冷静な表情で、今し方役割を終えたばかりの自動小銃に安全装置をかけ、未だ硝煙の臭いの漂う銃口を、足元へと下ろした。ガチャリ。銃器が重力の在りかを探るように、重みのある音を立てた。彼女は地面にしゃがみこんだままの弟の傍らへと静かに歩み寄り、身を屈めて、その動作を助けた。彼は姉に促されて神経薄弱の患者のような動きで立ちあがった。姉は言った。「見ろ」と。

ノボルは姉が人差し指の先端で指し示す先を見た。その瞳は空ろで奥行きを欠いていた。しかしその機能を放棄することはなかった。彼は見た。そして束の間、言葉<sup>ことば</sup>を失った。

そこには変わらず白濁した粘液の水面があった。それらは病を得た人々が生み出す身体<sup>からだ</sup>の残骸だった。その粘液の只中に、背中への銃撃を受けて死亡した学者の身体が、痛ましい姿で、うつ伏せの状態のまま倒れていた。そのほとんどが粘

液に沈んでいる。やがて、粘液の表面が静かに波打ちはじめた。その動きは次第に激しくなり、粘液の触手が無数に生まれ、それらの細かい手は学者の身体を乱暴な手付きで引きちぎっていった。まるで飢えた小動物が僅かな食料に群がるような動きだ。ほんの僅かな後、学者の身体は細かく分解され、粘液の一部と化していた。

呆然とした面持ちで事態の推移を眺めていたノボルに、姉が言った。

「病を得た人たちの唯一の栄養源が人間の身体なんだ」

弟はその一言に深い衝撃を受けて息を呑んだ。ツネコ姉さんはその悲しい沈黙を情報で埋めるべく言葉を放り込んでいった。

「肉体が溶解した彼らは俺たちと同じような食事が出来ない。口が失われ、歯を失くし、咀嚼することが出来ないからだ。その上、胃や腸は退化し、消化器官がまともに機能しない。だから彼らは別の食事の仕方を獲得しなければならなかった。病を得、身体を喪失したとはいえ、彼らは歴とした人

間であり、生命体だ。生命維持のためには栄養を摂取する必要があった。それで彼らが獲得した方法が、自らの粘液で食料を溶かし、その栄養分を吸収することだった。彼らの世話をする人々は、様々な食料で、それを試みた。しかし彼らは人体のみを唯一の栄養源とした。それはまるで、人間の過ちによって病を得た彼らの、人類に対する復讐のようだった。

当時の日本政府はその事実を難色を示した。当然だ。カニバリズムなんて時代錯誤の行為が、一般の人々に受け入れられるはずがない。しかし結局、彼らはそれを許可した。この問題を早急に隠蔽する必要があったからだ。それ以来、病を得た人々は定期的に人体を食料として与えられ、生き長らえているんだ。その間隔はだいたい半年に一度だ。それで彼らは生存に必要なすべての栄養素を吸収する。そしてその代わりに、俺たちに飴の材料となる粘液を提供するんだ。飴が忘却を促すのは恐怖を緩和するためだ。では恐怖とはなにか？それは人類がこの世界にとって不要な存在であることを認めることなんだよ。そして彼らは、そんな人類を粛清するために生まれた新たな存在なんだ」

ノボルはその陰惨な光景を、息を呑むことさえ覚束ない呆然とした意識下で、ひたすら眺め続けた。全身を膜のように

覆う細やかな震えも、今は彼の意識の埒外らちがいにあった。祈るよ

うに、煩悶はんもんを続けた。ツネコ姉さんが先刻発した一言が発達

の途上にある彼の胸を満たしていた。これは学者が望んだこ

とだ。姉は確かにそう言っていた。生命を絶たれ、悲鳴をあ

げることなく、彼らの食料となって空しく消えていく運命を、

彼が望んでいた？ ノボルは陰鬱いんうつな気持ちに呑み込まれて

いた。何故？ 何故、と問いが繰り返し胸を刺した。

「ぼく、ガバメントの理想郷に行きたいよ」と、込みあげる

気持ちを堪えきれず、ノボルは言った。不意に喉を突いたそ

の声は涙と交じり合い、震えていた。一度、気持ちを言葉に

すると、それは勢いを増して、明確な意志を胸の内に結晶さ

せた。彼は躊躇ためらうことなく続けた。

「向こうに行けば、今より豊かな暮らしができる。なにより、美味しいお菓子が食べられる」

「馬鹿なことを言うな」

ツネコ姉さんが怒声を張りあげた。その顔は、怒りを得て真っ赤に染まっていた。自動小銃を地面へと放り出し、その手でノボルの柔らかな頬を打った。彼女は本気で、血の繋がらない弟を叱り付けた。そういうのは全部まやかしなんだよ、と。

「俺はな、もううんざりなんだ。豊かさと言ってもそれは見せかけの豊かさだ。エネルギー問題や安全保障の負の部分を一部の地域に一方的に押し付けて、何の臆面もなく繁栄を謳歌することのどこが豊かなんだ？ そんなものは全部、ドイツニールランドに過ぎないんだよ。自分のことを強者だと謳う知識人や文化人も結局は、強者という名前のアトラクションを愉しんでいるに過ぎないんだ」

彼女は吐き捨てるようにそう言っつて、今し方まで学者の遺体があった粘液のほうを見た。それから彼女は言葉を搾り取るようにして言った。

「俺は男の性欲を満たすための虚構の身体を捨てた時、誓ったんだ。もう自分に嘘を吐くことはやめようって。なあ、ノボル。国家を滅ぼすにはどうしたらいいと思う？ 学者も言っていただろう。それは国民に遠くを見せないことだよ。

自国の利益だけを最優先に考えて、他国の痛みを無視することだ。今ではな、世界の国々は複雑に繋がりがあっている。先進国は第三世界から資源を搾取している。自国の環境汚染を防ぐためには、資源の調達を他国に依存するしか方策がないからだ。そうやってこの世界は安定を保っている。しかし先進国の繁栄の裏側で、第三世界は確実に枯渇しているんだ。飢えや貧困、病気が蔓延している。でもだからと言って、この地球に住むすべての人間が先進国と同様の暮らしを求めることは出来ない。不可能だ。何故なら、そうすれば世界が崩壊してしまうからだよ。俺たちの暮らしは常に他者を犠牲にすることで成り立っているんだ。でもな、それじゃきつと、世界は持たない。少なくとも俺たち人類は幸福になれないんだ。だから俺たちは想像するんだよ。そうすることでは、世界は救えないんだ。アメリカの強力な農薬を開発したクー

ル・ジャパン信奉者も、人一倍の想像力さえ持っていれば、それが他国の環境にどんな酷い影響を与えるか、判ったはずなんだよ」

ノボルは白濁した粘液が静かに蠢く様子を見つめながら、泣いた。涙は熱く、頬を滑り落ちた。しかし途切れることはなかった。彼の内面は理想郷への恋慕に燃えていた。一心に、新たな居場所を求めて揺れていた。遠い異国に行きたかった。それが謎のガバメントでも構わなかった。そこには豊かな社会があり、美味しいお菓子で満たされているのだ。そこに行きたい。ノボルは強く思った。貧しく不便なのは嫌だ、と。その傍らではツネコ姉さんが、打ちのめされたように佇んでいた。地面に放り出された自動小銃を拾い、鼻をすする。その姿は、豊かさの代償としての現実を呪っているように見えた。

「キヨム」と、彼女は力なく呟いた。それがどうやら学者の名前のようだった。その親しげな口振りには、ふたりの関係

をうかがわせるものがあつた。

「あんたは求め過ぎたんだ。理想が高過ぎたんだよ。だから俺はあんたを責めた。俺はどうしてもヒトの可能性を信じたかつたんだ。俺とあんたでは使う言葉が違った。分かり合えない他者だった。結局、互いに絶望するしかなかった。絶望は想像力の生んだ魔物だ。なら、俺はどうしたらいい？ なあ、キョム。俺も空っぽだよ」

二人は、いつまでもその場に佇んでいた。荒廃した世界は変わらずにそこにあり、二人を放そうとはしなかった。この洞窟の外に出れば、雨が静かに世界を洗っているだろう。しかしその雨は放射性物質に汚染され、世界を更に汚濁しているのだ。まるで第三世界の仕組んだ報復のように。

終わり